「攻め込んだ日本兵に強姦され、生後数ヶ月の娘が焼き殺された」

張秀英さん（女）、　　１９１４年４月生まれ

当時の住所：　安徽省烏衣街、浦口

証言する張秀英さん（左）

一九三七年十二月、日本軍が南京にやってきた時は二十三歳の時でした。もともとは山東省の出身で貧しくて南京方面にやってきたのでした。その時はすでに結婚していて夫は李春田と言いました。そして、三歳になる息子と生まれて三ヶ月の娘の四人家族でした。夫は、陶さんという名の地主の作男のような仕事をし、私も地主の家の手伝いと子守をしていました。私たちの住んでいる安徽省烏衣の村（浦口から数十キロの距離）にも「日本鬼子」（リーベンクイズ＝中国民衆は日本軍をこのように称し恐れた）が攻めて来るという噂が流れ、お金持ちの人たちはどこか安全なところへ逃げていきました。夫も地主の奥さんをもっと安全な村へ送って行かなければならないので、家にいませんでした。私たち一家はこんな貧しい生活をしていましたので、日本軍がやってくるよと聞いても、逃げることなどはできませんでした。私たちの住んでいる村は三百人くらいの人が住んでいる小さな村でした。

はっきりした日にちは覚えていませんが、冬の寒い日でした。日本軍がついにやってきました。私は地主の家の手伝いをしにいって、生まれて三ヶ月になる娘は家に寝かせていました。門の傍らに子どもをあやしながら座っていると、日本兵が近づいて来るなり村人を突き殺していました。私はびっくりしてしまって、逃げることすらできませんでした。私を含め村の女性四、五十人が捕まり、広場に連行されました。日本兵は「逃げなければ殺さない。」と言いました。何をされるか心配しながら私たちはそこに行きました。日本兵は私たちに銃剣を突きつけながら、下着一枚になるように言いました。もう言うとおりしなくてはなりませんでした。上はシャツ一枚下はパンツだけになり広場をぐるぐる走らされました。私たちが恐怖と屈辱で泣きながら駆けているのを三十人ほどの日本兵が手を叩いて喜んでいました。（なんて奴らだ日本鬼子は）と思いましたよ。それが終わると、三歳の男の子を抱いている私についてくるよう言いました。どうしようとおろおろしていると地主の家の陶小母さんが、「ついて行きなさい。でないと剣で突き殺されるよ。子どもをよこしなさい。」と教えてくれました。私は子どもをそこにおいて日本鬼子について行きました。日本兵は陶

さんの家の中に私を連れ込み私を強姦したのです。もう恥ずかしくて後は言えません。私は泣き続けました。日本鬼子はあちらこちらの家に火を付けていました。自分の家の方にも煙が上がっていました。
私は心配で、やっとの事で自分の家に帰り着くと、我が家はすっかり焼け落ちていました。私が強姦されている間に、哀れにも三ヶ月の娘は焼き殺されたのです。住むところも娘も、衣服もみんな焼き尽くされてしまったのです。
夫も留守でしたので、私は三歳の息子の手を引いて村の人と共に山の方へ逃げました。雪が降り氷の張り付いた寒い時期でした。食べ物もあまりなくお金は全くなく、山の中の廟に寝泊まりしていました。何日か経ったある夜、一人の日本鬼子が扉を開けて入ってきました。しゃべる言葉は分かりませんでしたが、私を押さえつけて犯そうとしました。下着に手をかけてから、私が生理中だとわかりました。その鬼子はいきなり何かわめいて、私の顔を平手打ちしました。そして銃で部屋の中の棚を壊し、さらに、ポケットからナイフをとりだしました。日本兵は「お前、死ね死ね」と片言の中国語で怒鳴りながらナイフで刺してきました。私は左手でかばいました。指が一寸ほど切れ骨が見えました。泣いている私の体の上から銃の台尻を振り下ろしました。日本兵は怒って出て行きましたので、助かりましたが、もう少しのところで殺されそうになったので私は怖くて泣いていました。ここにいては危ないので、もっと山の中に逃げました。
山の上では雪がまだ降っていました。食べ物もなく、坑に隠れていました。最も寒い真冬に外を逃げ回っていたので、私は悪寒と震えと発熱に悩まされました。この病状が何日も続き息子の世話もできませんでした。いっしょに隠れていた人に、「稲草の焼いた熱い灰の固まりをへその上にかぶせて、繰り返し暖めたらよい。」と教えてもらいました。そうしているうちに少しずつ良くなってきました。
この後、私は、夫を捜し、やっと家族三人で助け合って浦口で暮らせるようになりました。世の中が落ち着いてからですが、夫は駐屯している日本軍に苦力として連行されました。揚子江岸辺の船着き場で積み荷の上げ下ろしや、老江口で散らばっている石炭拾いをさせられました。わずかな賃金は貰えても食事は出ないので、私は毎日、昼ご飯（飯の上に汁をかけたりおかずを乗せただけの質素な食事）を夫の作業現場に届けていました。ある日、私はご飯を持って浦口の九号船着き場に向かっていました。四号船着き場を通り過ごしたとき、運悪く日本兵の見張り兵に見つかってしまいました。兵隊は、中国語で良民証を検査すると言って、私の良民証を取り上げたきり返してくれません。これがないと夫の所へも行けませんし生活できなくなりますので、私は「どうか、返してください。」と何度も頼みました。この日本兵は一時間以上も私に絡み行かせてくれません。そして、挙げ句の果てには、「お前は俺の嫁さんだ。俺はお前の亭主だ。」と言いだし、「サイコ、サイコ、お前と寝たい。」とわめいて、私の

腕を掴んで放しませんでした。私は抵抗して夫や子どもの名を呼び続け泣き叫びました。それでも日本兵は力任せに河岸に私を引きずっていき、「お前は死ぬんだ。」と言って河に落とそうとしました。その時、他の見張りの日本兵がこちらを見ていました。それに気づいたこの男は、やっと私を放し、今回私を蹂躙することはできませんでした。それ以降、私は恐ろしくて敢えて船着き場には行かなくなりました。

日本軍が揚子江の北側の浦口に攻め込んでから、岸辺には至る所に死体がありました。どこかから逃げてきて身寄りのない人の死体だったのでしょう。誰も埋葬しないので放置されていました。私たちは敢えてそれを見ようとはしませんでした。日本兵は町の至る所で勝手なことをしていました。自分の思い通りにならない中国人がいれば、苦力を連れてきてその人をムシロの袋に入れて揚子江に投げ込み溺死させました。また、軍犬をけしかけて中国人に噛みつかせました。犬は大変残酷に訓練されていて、のどや腿に食いつきかみちぎりました。苦力は重い荷物を担いで細い踏み板を渡って舟に積み下ろしをします。ちょっと作業が遅いと監視の日本兵に鞭で打たれたり、あまりの重さに踏み板でよろけたりすると、揚子江に転落しました。揚子江に落ちると命をなくす者がたくさんいました。必死で泳ぎ着いて岸に上がっても、損害を与えたと言うことで死ぬほど殴られるかもう一度、重しを付けられて河に放り込まれて溺死させられる人も見ました。ほんとに、無駄死にでした。

南京大虐殺の時、私は二十三歳でした。頭は丸坊主にして、顔に灰を塗り汚くして極寒の山中を逃げ回りました。人間の暮らしではなく、私は本当に死ぬ思いをしました。日本兵は村に入ってから村人に出会えば殺しました。陶家の次男と三男はあぜ道で日本兵に見つかり腹這いになったところを銃で撃ち抜かれました。地主の長男も逃げるところを殺されました。

亡くなる前、病床に臥す張秀英さん

これは私が自分の目で見た事です。決して嘘を話しているのではありません。日本では、南京大虐殺を嘘だという人々や政治家がいると聞いていますが、私はこんなひどい目にあって娘まで焼き殺されたのです。まだ生きていたら六十三歳になっています。そして、刺された指は曲り、中の台尻で殴られたお陰で腕は六十年以上も上がりませんし、生活に苦労しています。

日本人は、これでも南京大虐殺は嘘だと言い張るのでしょうか。

【1997 年収録、1998 年来日証言】